
生命

麻結美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生命

【Zコード】

Z2953V

【作者名】

麻結美

【あらすじ】

結婚して半年の私を襲つた突然の出来事。

「ねえねえ私、なんの病気?」

「病気じゃない」

病気じやなかつたら一体何なの?

教えて、旦那様!

結婚してからの旦那様と私の願い。

それを叶えられるかどうかは神様のみが知っている。

「うう」

ある日、夕食の用意をしていた私を突然襲った体調不良。

頭が痛い、とかそんなものじゃない。

気分が悪いのだ。

⋮

旦那様と結婚して半年。

慣れない家事や料理の腕前もなんとか人並みになってきただらり、
今日この頃。

⋮

最初は「飯しか炊けなかつた私を人並みの腕前に成長させてくれたのは、ひとえに旦那様のスバルタ教育にある。

『俺にまともな料理を食わせろ！』

この一言で始まつた旦那様との結婚生活 & amp; 家事や料理のお勉強生活。

結果、掃除機も使えるようになつたし、ニシンも壊さずに使えるようになつたわ。

料理の腕は……何とかお鍋やフライパンを買ひ換える更新記録を10でストップしているわ。

せっかく今日は仕事でいつも忙しい旦那様の為に大好物なカツカレーを作りうと思つたのに。

なのに、匂いだけで気持ち悪くなるつづりっこなことよー。

とりあえずカツを揚げる」ことがどうしても出来ずに断念した私はカレーだけ作り、「飯の炊ける匂いにうつと顔を歪めながらもなんか普通のカレーライスにまで仕上げた。

「よく頑張ったわ私！……ああ、でももうダメ」

明日は久々に旦那様がお仕事お休みなのに。

今日は夜遅くまでまつたりと一人で過ごして、明日は楽しくお出かけする予定だつたのに！

「どうしてこんな大事なときに体調悪くなるのよー」

ふらふらとコビングを歩きながら私は置いてある大きなソファーに横になる。

「ああ……だいぶ楽。旦那様が帰ってくるまでの間、少し寝よう」

気分の悪さが最高潮に達した私はそれから逃れるために扉を閉じた。

：

…

「…………い、…………おいつ」

「んう～…………？」

「大丈夫か？顔が真っ青だぞ」

「あ～…………お帰りなさい」

大好きな声に呼ばれて起きたら、目の前に私の大好きな顔があつた。

私の愛しい旦那様だ。

「熱はないみたいだが、いつもより体温が高いな」

「ん～…………大丈夫。ちょっと寝たら気分がすつきりしたから」

私の身体を起こして肩を抱き、私のおでこに大きな手をあてた旦那様は心配そうな表情でそう言つてくれたが、本当に寝たらちょっとすつきりしたのだ。

「なんかカレー作つてたらいきなり氣分悪くなつてねえ。カツ揚げようと思つたんだけど匂い嗅ぐだけで氣分悪くなつたから、今日は

普通のカレーライスなの。」めんね？」

「別にそれはいいが……どうしたんだ？変なものでも食べたのか？」

「失礼ねー。」

捨てい食いなんてしないわよーーー！

「痛つーー！ひつ、やめろ」

「失礼なこと言つたのは貴方でしょーー！」

旦那様の頬つぺたをびょーんと伸ばして私は怒つた。

いつまでも子供扱いしないでよーーー！

「やうこつといふのが子供だつて言つんだよ」

「もうーー！ちはお腹空くのにカレー やーー！飯の匂い嗅いだだけで気分悪くなつて最悪なのにーー！」

「はあ？腹は空くのか？」

「うふ。今までお腹痛いの。いつもせこなに空かないのこね

私がそいつと田那様は右手を顎にあて、何か考え込みだした。

「……そりゃ最近よく寝てるな

「あ、そりゃもうどれだけでも寝れちゃうのよ。ちよつと横になつて目を閉じたら今みたいにすこ一時間たつてる時あるじ。涼しい季節になつたからかなあ？」

「いや、ちよぢゃない

「？」

じーっと動かずに同じ体勢で考え込んでいた田那様は、突然私のほうを向き、とんでもないことを聞いてきた。

「お前、最後に生理來たのいつだ？」

「はああー? 何よ突然! !

「いいから答える。大事なことなんだからさつと答へる

ズイズイと私の身体の上に乗り上げるよ~~う~~^うに覆い被さってきた日
那様をなんとか避けながら、自分の指を折つて考えてみる。

「えへ……つと、確か……あれ？」

そういえば私、先月来てないよ。

「あれ！？」

いつもぴっちり誤差なく来ていた礼儀正しい子が来てないよーーー！

なんで気づかないの私！

「俺の専門じゃないが、おそらくそうだらう。確認して明日病院行
くぞ」

「ええーーんじうしーーー！」

「どうしてって……まさかお前、じじままで俺が言つてゐるのに気づか
ないのか？」

「何が？生理が来てないことは気付いたよ？」

私の言葉に日那様は呆れたようなため息をつく。

「はあ……」じんなんで大丈夫なのか？

いや、今から更に教え込んでいけば人並みになんとか……」

なにやらぶつぶつと独り言まで言い出した旦那様。

ちょつと、一人の世界に入り込まないで！

私も仲間に入れてよ～

「ねえねえ、私、なんかの病気なの？」

「病気じゃない」

「ほんと？」

「ああ。それは断言できる」

良かつたあ。お医者である旦那様が言つなら間違いないよね。
ちゅうと安心したけど、結局この体調の悪さの原因は？

「だからお前の腹には俺とお前の子供がいるかもしないんだ」

「ええええ！？」

一瞬、旦那様の言葉が理解できなかつた私。

嘘！？本当に？

「まだ佩つたん」なのにならぬの?」「うーん。」

「まず間違いないだろ？ だから明日病院に行くぞって言つてるんだ」

また大きなため息をつく旦那様を余所に私は嬉しさで頭がいっぱいになっていた。

私と旦那様の子。

半年目で授かつたかもしだれない大事な人の子供。

「いや～！嬉しい～」

私は思いっきり旦那様の首に抱きついた。

「こらっ、暴れるな！

子供がいるかもしねないんだぞ」

旦那様にそう注意されてハツとする。

「じめんなさあい

「……全く、母親になる自覚を持つ。……まあ俺も父親の自覚を持つ
たないといけないな」

「うんー。」

その日の夜は興奮してなかなか眠れずに困っていると、旦那様が優しい笑顔で私を抱きしめてくれて、気がついたらぐっすり眠れたみたいで、いつの間にか朝を迎えていた。

そしてなんと！

旦那様がおいしいお料理を作ってくれていて大感激！

旦那様つて凄く器用でお料理も上手いのよね。

「お前が下手なだけだ」

「上達したわよー。」

たまに?ケンカするけど旦那様は私を大事にしてくれて私も旦那様を愛している。

そんな二人の間に生まれてくる予定の赤ちゃんのHロー写真を病院でもらって、泣きじやくる私を宥めながら、目元につつすらと涙を浮かべていた旦那様がいたことは秘密です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2953v/>

生命

2011年7月31日22時07分発行